

# 町づくり どげんすると 博多の山笠・暮らし文化で 生き生きとした高齢化社会に、せないかんやろうもん

令和5年度市民まちづくり研究員 松尾 孝司

## はじめに

全国的に福岡市をアピールするときに、博多祇園山笠は、大きな存在感・宣伝効果がある。心意気を感じさせ、現代人がなくしつつある個人の晴れ舞台と意識する人もいる。福岡市の精神的な都市としての象徴でもあるだろう。その山笠を軸に、十日恵比須、どんたく、放生会、くんち、夫婦恵比須……と博多は一年中、祭りが続き、その祝祭の中に生き生きとした人間の暮らしの風景・絆がある。

心地よい空間・景観とは、単なる都市デザインの設計図のようなものではなく、生き生きとした人間の顔が見える、暮らしやすい、生きるよろこびを実感できる風景だ、と考える。

大切なのは、人間の息遣いの聞こえてくる町的生活空間としての景色・風景であろう。心がわくわくしたり、やすらいだりする情景が必要なのであろう。はつらつとした、元気な人間のいる景観に、どうするのが問われている。

かつては、都市デザインというと、建築設計のプロが鉄筋コンクリートとガラスを主体にした造形を優先し、「雨漏りがする」といわれるなどの建築物も建てられた。その後は、経済効率・収益を高めるデザインの高層ビルが街の中にはらんするという現実である。そんな都市のデザイン・町づくりに改めて「住む人・働く人の視点に立った町づくりとは」と、問いかけるものは何だろうか。

町内で、暮らし・商売を支えあっていた、農村地域の村落共同体と類似の部分もある都市生活共同体の時代と、企業に勤めるサラリーマン中心の時代とでは、差がある。時代・生活のずれもあろうが、長年の博多の暮らし・伝統行事の中に、高齢化・孤独感の強まる時代の解決策のようなヒントが息づいているのでは、と考えた。

過当競争社会、経済効率優先、子供たちに伝えるものを見失い拠点都市への一極集中が進行する少子高齢化社会といわれる時代、どう、現代の悩み・課題と向き合うのか。自らの店・企業活動よりも地域社会／町とともに暮らすことを誇りにし、尊重されることを誇りにできる生き方・暮らしの風景の中に、共生・共助のよろこびをみつけなければなるまい。

自由な職業選択の時代、つねに競争を強いられ、とくに定年後は、暮らす地域で、ばらばらになってしまった都会の匿名性社会の中で、孤独な老後を迎える現代人にとって、共生社会の積極的な意味合い、公助の限界も考える必要もあるのではないか。コロナワクチンの接

種など公的サービスが充実し、町内で支えあうという暮らしの共助・福祉の必要性が薄れていく時代にあって、現代社会が無くした、コミュニティ・町内の可能性とともに、その時空を超えた町の絆の可能性とともに、祝祭を伴う人生の晴れ舞台、心意気の今日的意義も博多山笠を軸として博多の暮らし・文化・自治の視点から見つめてみたい。

かつては寺社が地域のみなさんの集う場として使われてきたが、地域の絆を改善する、深めるための場として、公民館や老人憩いの家の活用などを工夫して、にぎわいの場が必要ではなかろうか。キリスト教でもミサのパンとワインが大きな意味を持つ。ただ、公民館などは、広い校区の中に一カ所、ポツンとありがちで、なかなか利用しづらい。山笠は、人をひきつける、呼び寄せるエネルギーを秘めている。そのノウハウをどう生かせるのか。

近年の都心の商業施設・企業支店の集積と、住宅地の郊外化は、住みにくさ、生きにくさも課題となっている。「ショッピングセンター、ビジネスセンター重視の町づくりで、よかとですな」、「生き生きとした高齢化社会に、せないかんやろうもん(しなくてはならないでしょう)」との博多っ子の声も出ている。そんな、現代のニッポンにとって、博多の暮らしの生活文化・山笠は、高齢化社会になりつつある現代日本にとって大きな課題解決のアドバイスを示唆している。

ただ、今日の博多山笠は、観光行事、観光・スポーツ・イベントとして見られ、正しく全体像が理解されていない傾向が強い。誤解されている部分も多いのではあるまいか。さらに、その暮らしの文化や知恵を知る人は極めて限られている。

インターネット時代の「絆」づくりへの工夫も必要であろう。関東大震災から100年が過ぎ、公助の限界も指摘されて市民の力が期待されている。男女共同参画社会づくりへ力を注いできたように、高齢者参画社会づくりの第一歩にもしたい。これは学者・研究者の視点ではなく、博多の暮らし・文化を語り継ごうとしている博多を語る会の一員、市民の気づきの目からのまとめである。

櫛田神社の前で育ち、博多山笠や松囃子などに参加した経験をもとに、わくわくする高齢化社会をつくり出すために、ささやかながら高齢博多っ子の体験的な『知恵』を、活かしたい、とのレポートである。昭和への懐古趣味も混じりそうである。

## 1. 博多山笠

### (1) 山笠の起源と歴史

博多の暮らし・祝祭の軸である博多祇園山笠の歴史について一応簡単な歩みと祭りの日程に、ふれておく。

山笠の起源は、いくつかの説があるが、博多祇園山笠振興会などは、鎌倉時代の仁治2(1241)年、疫病退散を祈祷して、承天寺の僧・聖一国師が施餓鬼棚に乗って、甘露(祈祷)水をかけて町の中を回ったことにある、としている。山笠は、ご神体であり、それをかついで回るといのは、都市住民は、健康管理・維持のために、ご神体と一体となって健康を維持

できるというのである。信仰と、健康づくりという「ご利益」が一体化している。

町内、流、あるいは山笠振興会などの単位ごとに頻繁に会合が開かれ、それが楽しく「ご利益」が期待できる。だから、町をあげて、祭りの運営の中心である当番町になったときに立派な山笠づくりを競ってきたといえる。

表1が示すように、山笠の歴史には、外部からの批判・圧力が繰り返された。

**表1 博多山笠の近世・現代の主なできごと**

明治5(1872)年	新政府・福岡県から禁止令 博多山笠は、松囃子とともに「江戸時代の陋習」「裸で野蛮、朝から酒を飲む」などと批判された。
明治8(1875)年	簡素なゆかた山笠建設(豪華なものにしないことを条件に許可)
明治16(1883)年	昔のような山笠建設が認可され復活 地域の人たちの絆となっていることや暮らしのメリットなどが理解されたが、電信のケーブル架設で山笠はしだいに低くなる。
明治31(1898)年	福岡県知事から「朝から裸で、酒を飲み、しかも電線などを壊す」などと批判にさらされ、中止を求められた。 九州日報の主筆・古島一雄が、「山笠を低く、法被を着用すればいい」などと提言し、今日の法被着用となった。 (もともと、氏神様に奉納に行く時は、白い半纏を着ていたのではないか)。
明治38(1905)年	福神流が追い山ならしめるとき雷鳴を太鼓の音と聞き違えスタート、櫛田入りし、トラブルが発生、福神流は、これ以降、山笠を建てなくなった。
明治43(1900)年	福岡市内に電車の架線が敷設され、ほとんどの山笠を低くせざるを得なくなった。
大正7(1918)年	台風で据え山全滅 (近年はビルの中の飾り山笠が増えた)。
大正9(1920)年	第一次大戦後の不況で、いったん全部の山笠が中止の決定、 その後、異論が出て、4つの流から山笠が出た。
昭和20(1945)年	福岡大空襲で町の大半が焼失。地元住民が郊外へと出て行った。
昭和41(1966)年	伝統のある町の構成は町界町名変更で133カ町が24カ町になった。 お向かいさん同士、同じ町だったところが別の町になり、地域コミュニティが破壊された。

出典：筆者作成

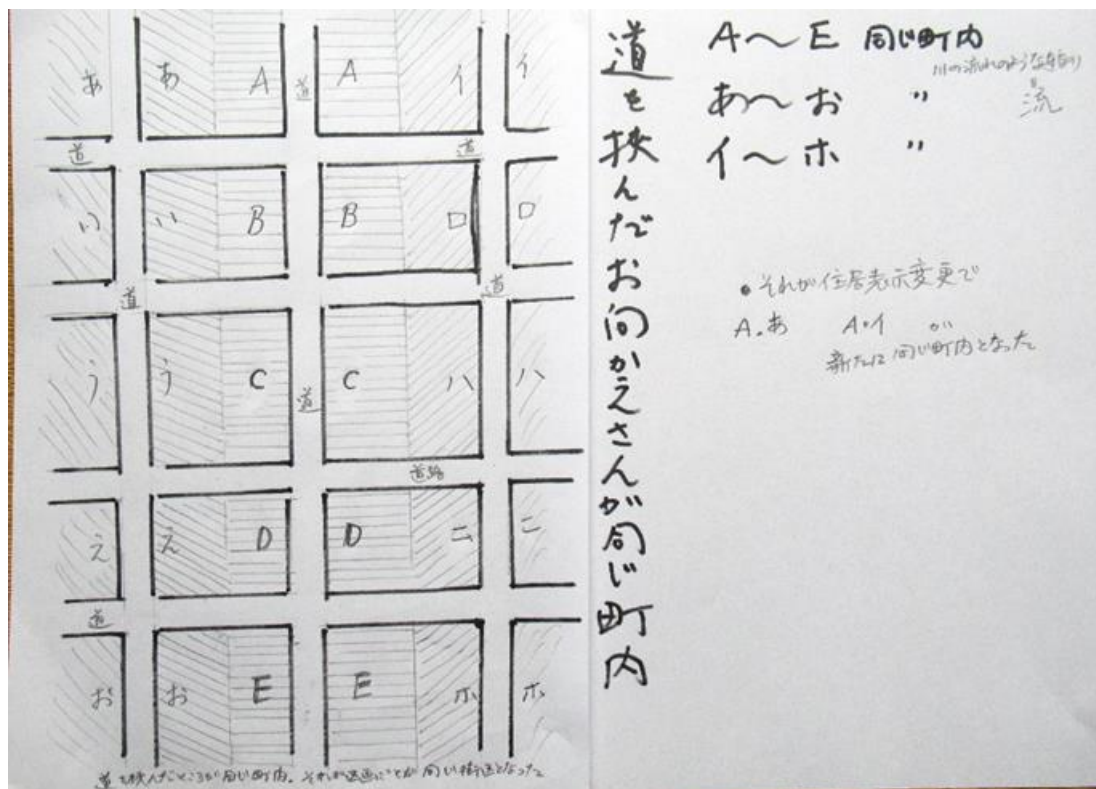
この表のように、こうした外圧を乗り越え博多っ子が存続させてきた原動力とは何なのか。暮らし、共助・共に楽しむという人間の原点が息づいているからであろう。

町界町名変更で解散に追い込まれた土居流は、若手が山笠を続けたいと保存会を結成し動いた。当初は、50人ぐらいの参加しかなかった。しかし、「町は分断されても心は一つ」と、行政の決定を乗り越えて、道路方式による旧町を別に存続させたことは町の暮らし、文

化の継承にとっては、大きな参考例であろう。

このとき、呉服町流は解散、西流、東流などへ流の再編が行われた。その一方、山笠存続への、さまざまな努力、模索は続いた。その心意気の一つが、上川端通の走る飾り山の誕生である。江戸時代、明治時代まで続いていたスケールの大きな山笠が再び町の中を走ったのである。また、戦後間もなく発足した中洲、千代流の誕生の中にもドラマが潜んでおり、いろんなところに山笠を存続させる知恵・工夫をみることができる。

図1 イラスト・町の住居表示の変化



出典：筆者作成

※住居表示前は、道(街)路方式の町だった。道を挟んだ、お向かいさんが同一町内。図ではA～Eなど町が縦につながり、町の連合体である「流」を組織していた。これが街区方式の住居表示では、住居区画ごとが町の単位となり、たとえば、道路西(左)側では「Aとあ」「Bとい」などが町の単位となり、道路東(右)側では「Aとイ」「Bとロ」などが同じ町の単位となる。



写真1 東長寺前の清道旗を回る山笠 6人乗り

(筆者撮影)



写真2 東長寺前の清道旗を回る山笠 2人乗り

(筆者撮影)

※速さに重きを置かない流(写真1)は、台上りが表、見送り<後方>それぞれ3人ずつの計6人と山笠が重くなっても、その伝統を守る。しかし近年は、表、見送り、それぞれ1人の流が多い(写真2)。それぞれの流が大切にしているものが違うこともわかる。

一方、現在、商店街や企業などが建てる飾り山には、従来の舁き山とは違った課題がある。高さのある豪華な飾り山は、かつては、町の中を舁きまわっていた往時の山笠のなごりでもある。電線や電話線が町の中に架設されて、現在のような低い山笠が走るようになって、高さを保ったままでは動かさない現在の舁き山笠、飾り山笠という 2 つの「かたち」になった。しかし、建設予算は、それなりに高額になる。だから、飾り山は、商戦を盛り上げたいという商店街など限られた場でしか建設しにくいという現実がある。しかも、山笠を舁いて櫛田神社に奉納するという晴れ舞台はなく、山笠建設に汗を流した皆さんを顕彰する場がないのである。苦労ばかりが多く、晴れ舞台がないという悩みである。

博多山笠は、昭和 54(1979)年に国重要無形民俗文化財になった。現在、福岡市は、誇りであり市のプラスイメージになっているとして、年間 2780 万円の補助金を出している。内訳は、舁き山・各 215 万円。飾り山・各 90 万円。

## (2) 山笠の特徴

### ①山笠の法被は参画している町の誇り

参加する町内ごとに法被がデザインされている、というのも山笠の特徴である。住んでいる町・地域の誇りとして着ている。町は、道路を挟んだ家々を同じ町とする道(街)路方式とされてきた。「流」という町の連合組織で、同一の白地法被を作るところもある。

法被は、祭りの準備期間である 6 月から着用する。町名などが一目でわかるようにデザインされており、背中に大きく社名がわかる背広を着て町を出歩いているようなものといっいい。自分の暮らす、商売をしている町を誇りにしている。どこに住んでいるか、所属しているのか、生活の場を博多っ子が誇りにできるところでもある。一方、冠婚葬祭・日常の暮らしの中で、どこのコミュニティ(町内)のものかを明らかにすることは、町に対して強い責任感も生じる。個人と町が一体となっている。



写真 3 所属する町が一目でわかる法被。久留米緋のデザインに特色がある。(2023 年 7 月 14 日筆者撮影)

博多の街は、呉服を売っている店が多い町もあれば、海産物関連の店が多い町もあった。職人さんの多い町もある。山笠は、それぞれの町の個性をアピールする場でもある。いろんなところから人が集まって栄える町という特色がある。個性の違うところを尊重する。飾りつけた山笠の出来栄を誇りにする、というのは山笠の原点である。山笠は商家、工芸作家、大工、織物…地域の総合力が生きている。人が集まってきたくなる「都市の知恵」が、地域づくりのヒントが詰まっている。

住んでいる、暮らしている町、地域を誇りにして生きることができる。離れていても一つの共同体を意識させるところに大きな存在意義があるといえよう。

長い年月、1000年近く続く祭りには、古代から国際交流で栄えた博多という地域の人から伝えてきた秘密がある、と考えていい。いろいろなピンチを乗り越えて続く無形民俗文化財の息づく博多の「知恵」。農耕の豊作を祈念したり、豊作を感謝したりする春と秋の祭りが多いが、人口が一極集中している現代都市の博多に息づく夏祭りの「知恵」は貴重である。

## ②気易く集まることが、わくわくする

山笠に現代の都会人が集う。なによりも、仕事を終えた後から始まるケースが多く、祭りもシンプルで参加しやすい。法被も高価ではなく、手に入りやすい。まず、ゆっくりと老若・子供が水を浴びるなどしてスピードを上げずに一緒に走る、というところがいい。追い山では、体力に応じて、近道の選択ができることもいい。

一緒に連合体を組む10か町ほどの中を、水を浴びて回ったあとの直会も意義深い。短時間、異文化・異業種…酒食をともにしながら、いろんな人たちの交流の場となっている。人が集まって語り合えて楽しい、役立つということを肌で知っているのである。直会はテントの詰所で、30分ほど。向き合ったもの同士が一本のチクワを握って、回し合うってちぎって食べたり、梅焼酎につけたあとの梅の実を食して語り合う、という例もある。簡素に短時間で仲良くなる、ふれあいの場だ。

近年は、ふとしたことがきっかけで山笠に参加した人間が、その面白さなどに強い関心を示し、夏休みや勤務の間を縫って福岡にやってくる参加するケースが目立つ。遠く関東や海外勤務者が駆けつけるという例もある。

博多山笠への参加は、きわめてシンプル。氏神様への奉納というスタイルで、勤めている会社や経営している商店の役職などとは関係なく、みんな平等であるところがいい。健康づくりとともに、直会・会食の場の出会い・語らいの場としてのコミュニケーションの場の機能が重要である。ヨーロッパ風でいえばミートアップ、異文化交流の場、である。

基本的に7月9日から15日早暁までの都合のつく日に参加すればいいので、リーダーシップを発揮する必要度の低い参加者は「お客さん」のように気軽に加わることが可能なのである。期間中、祭りが始まるのが、午後5時ごろからというもの、「一応仕事ですんだあと」で、周りへ仕事の負担をかけることは少ない。参加者の都合を勘案して参加できるのである。いろんな人との健康づくり、出会いの場を楽しめばいいのである。



写真4 山笠の詰所で直会の準備 (写真提供：池田節子氏)



写真5 詰所で直会 (写真提供：池田節子氏)

### ③山笠の行事日程の中に見る「都市の知恵」

山笠は、博多っ子の暮らしの中に一年を通して息づいている。7月15日の追い山が終わった後、飾り物などを外し、6本の棒だけがついた山笠台を受け取り、次年に向けて、流内の会合などを重ね準備を進めていく。一年を通して、町の人が語り合う場があるのである。町内、流内、全部の流、それぞれの調整・打ち合わせのために、ひんばんに寄合が持たれる。祭り本番は旧暦では6月1日から15日までだった。現在は7月1日から15日までとなっている。観光行事の関心から一部だけ注目を集めていない傾向にある山笠の全貌・奥深さを知っておくために、山笠が毎年7月に入ってから執り行われている祭りの詳細日程を、表2のようにまとめた。



表2 博多祇園山笠の行事日程（7月1日～7月15日）

1日	<p><b>当番町お汐井取り</b> 当番町は各流を構成する流のリーダーシップを担う。健康ウォークの始まりである。</p>
9日	<p><b>参加者全員による流のお汐井取り</b> 梅雨時の健康維持にも役立った。まず箱崎浜まで片道約3キロ、往復2時間足らず。いわゆる、祭りのウォームアップの機能もある。現在のウォーキング健康法の先取りといってもいいのか。病気退散を祈願して始まった、という起源にも、都市の人たちの健康法としても大きな意味をもっていた。</p>
10日	<p><b>流れ昇き</b> 10カ町前後の町で構成されている流（川の流のように続く町の連合体・ミニ校区）の中を昇いて回る。最後の直会は、最も大切なところ。心理的にも、水を浴び、ひたすら走り、軽い飲み食い。最後の後片付けも若手がやるので、長時間、飲み食いはできない。短時間で、ストレス社会からの解放感を味わえる。現代社会から隔離して、悩みを忘れさせるというカウンセリングの意味もあるのではないかな。</p>
11日	<p><b>朝山（祝儀山）</b> もともと神聖な奉納祭事のかたちが残っている。台上がりは、一般の法被は着用せず、無地の法被を着用。昇き終わった後、土居流では各町ごとに「捻切り」という行事がある。ちくわと梅での会食である。この日、子どもを山笠台に上げて昇く流も。夕方は他の流域内を昇いて回る他流れ昇き。ただ、近年は、やっていないところが増えた。</p>
12日	<p><b>追い山ならし</b> 追い山のコースを1キロ短縮して榎田神社から博多小学校前まで博多の町を走る。</p>
13日	<p><b>集団山見せ</b> 昭和37(1962)年から。福岡・博多に貢献した人の顕彰にもなる。当初は「観光宣伝隊ではない。なぜ、博多の祭りを福岡に持って行く必要があるのか」と参加しない流、人もあった。「福岡市から、かさむ山笠建設費用にあてる補助金を出してもらおうためと言っても、博多の祭りを、よその土地に昇き入れる必要はないのではないかな」などといった声も出た。参加を断った人や流は、福岡に山笠は昇き入れないが、伝統の山笠の代わりにと、別の飾り山を天神まで昇いて祭りをサポートしたこともある。時代は移り、今。山笠に貢献している人たちに台上がりしてもらっている。例年、台上がりの声がかかる福岡市議も、会派を超えて喜ばれている。</p>
14日	<p><b>追善山</b> 各流とも、それぞれの流内を昇く流昇き 土居流はこの日に追善山。山笠に貢献した人、つまり地域に貢献した人をたたえる場。「祝い唄」を歌う。翌朝の追い山に備えて、しないところもある。流によっては、別の日にするところもある。それぞれの流の独自性を尊重しておこなわれているところが自治の精神であろう。</p>
15日	<p><b>追い山</b> 1687（貞享4）年からの記録。旧暦で行われていた時代は、満月の下、榎田神社前の土居通りで待機。夜明けを待って神社境内へと入っていった。満月が西の空に沈み、東の空から太陽が昇り始める夜明け、いのちが輝き出す瞬間でのスタートだった。テレビ各局のライトに照らされっぱなしの現代では、おごそかな雰囲気はわかりにくくなり、観光ショー的でもある。かつては前の山笠が東長寺の清道を回ってから次の山笠が榎田神社に入っていた。前を走る山笠と一定の距離が開いたところで、次の山笠が神社境内へ入るという方式だった。それが、トラブル防止の策でもあった。ところが時計というものを博多っ子が手にして、5分開けてスタートという方式へと変わっていった。タイムレースとの「誤解」が広がった原因は、新聞社が作ったといっている。明治20年代から九州日報と福岡日日新聞がタイムを計測し記事にしている。 <b>※筆者所感</b> 流ごと大切にしているものが違い、山笠の重量の差や、台上りの人数に違いがあるなど、単純にタイムを比較しても意味がないし事故を招く。</p>

出典：筆者作成

#### ④博多のぐりょんさん・女性の見ている山笠

山笠は、男中心の祭りである。女性が汗を流しているような場面は、陰に隠れて見えにくい。男中心の祭事で、「祭りの表舞台に参加しない女性の人権が無視されているのでは」との声も出ている。しかし、そんな誤解・短所にも、目を向けて、町づくりへと祭りを生かしていかなければなるまい。

博多に生まれ育った女性たちからは、山笠を評価する声を多く聞く。博多区上呉服町に暮らす池田節子さんは、「6月になると、女も男たちと一体。気持ちが騒ぎよります。祭りの間の直会のメニューをどげんすとか。直会当番のスケジュールの調整が始まります。私の町では、コロナ前までは一日の約50人ぶんを4万か5万円ほどを目安に作っていました。コロナの間は、集まることを避けて、仕出し屋さん注文することもありました。女性は、直会の準備がすむとテントの外に出ます。あと片付けは若手(祭りの若い男性)がしよります」と話す。

博多の女性は、祭りの表舞台に立つというより、いつでも商売の先頭に立つという役割が多いのだが、博多区須崎町の徳安和美さんは「若い時は、(法被姿の)だんな(夫)がよく見えた。しかし、子供が生まれてからは、子供たちが山笠で育てられていると考えるようになり、礼儀や作法なども含めて人間としての成長の場になっとなります」と話す。

「町・地域をあげて自然体の子育ての場になっている」との理解が、長く祭りを存続させてきたのである。

博多区奈良屋町に住む西頭こうこさんは、那珂川市などで生まれ育ち、結婚を機に博多の町で暮らすようになった。「男にとって山笠は楽しむことがある祭りやろう」と思っていたが「子供を育てるようになって、とっていい」と思うようになった。「近所のおじちゃん、おばちゃんから、いろんなことを教えてもらえるし」という。

福岡商工会議所の副会頭も務めた中洲の西川ともゑさんは「祭りは、住む人のコミュニケーションの場。それがなくなったら町は崩壊します。山笠があるけん、博多たいでしょうもん」と語る。

平成14(2002)年まで、山笠の詰所に立てられていた「不浄の者立ち入るべからず」の立て札が女性蔑視だと、一部の団体から撤廃を求められ、翌年に撤廃されたが、森弘子さんは、その著作『博多のくらし』の中で「山笠に出るダンナや子どもの締め込みを締めるところから、毎日の法被の洗濯。昔は洗濯機なんてないから、このことだけでも大変な作業。その上、山笠に出ている男が留守の間の商売、家の取り仕切り、直会の準備、全部、全部、博多の女は、ごく当たり前やりこなしてきたのだ。そして、山笠に出ているダンナを見れば、かっこいいと思い、家の前を山笠が通れば、一心に勢い水をかけて、男たちを元気づける。だから男は女に頭があがらない」と、書いている。女性たちの声は「私たちやあ、不浄のもんやら思うとらんモン」と付け足す<sup>(1)</sup>。

### (3) 山笠も変容しているということを考慮しなければならない

博多山笠に、現代の高齢化社会の課題を解決へと導くヒントが隠されていると思う半面、山笠自体が変容しており、その見えにくくなりつつある原点を見つめ直すことも必要である。というのも、それぞれの町の山笠に参加しているのは、その町に住んでいる人というよりも、祭りのときにやってくる外部の人、という事例が目立つのである。町のトップである町総代が、遠く離れた土地に住んでいるという町の例もある。博多の中心部の都心過疎現象が進み、町の運営が難しくなっているという現実にも向き合わねばなるまい。ただ、祝祭をきっかけにした出会いが時空を超えた絆、オンライン時代の絆を育むという意義も大きい。

ベッドタウンという郊外の核家族の多い新興住宅地では、各地から、いろんな価値観・文化規範を持っている人が移り住んでおり一緒に、地域の課題と取り組むという時間は少ない傾向がある。住んでいる町を誇りに思ったり、集まって課題について語り合ったりする共通の目標がなかなかみつからない。その解決法は模索の段階だ。「人を集めることのできる魅力的なリーダーシップのある人間がいるときは、活気があるのに」などの声だけが残る。一方で、「女性が地域づくりの先頭に立ったほうがいいのに」との指摘は多いが、女性活躍という風土は根付いていない。

町で一緒に暮らすことは、けんか・対立もしつつ暮らしを支えあうということである。私が子供のころ暮らした中小路(現・博多区上呉服町の一部)という東西100<sup>メートル</sup>ほどの町には、魚屋、八百屋、風呂屋、文具店、本屋、電気店、洋服店など、生活に必要なものは、町の中で売っていた。暮らしを支えあうという機能も町にあった。

現代は、町外にオフィスなどのある企業に勤め、町は寝るためのもので、周りの人の助けはなくても暮らせるというベッドタウン的傾向が強いが、定年後、第一線を退いた後は、地域からの孤立・孤独の不安がつきまとっている。高齢化・孤独な社会を乗り越えるためにも、住む人の共助の知恵を見つめ直すことは喫緊の課題であろう。それは、行政になんでも頼らず、自治の精神も生かさねばなるまい。

山笠の流の最高責任者である総務も務め、奈良屋公民館長も務めた西頭敬一郎さんは「町をつくる、ということは人をつくるということ。しかし、就職から転勤、さらに勤務先と住居が別という現代の博多にとって、難しい問題も多い」と、課題も指摘する。

長所を生かし、課題と向き合い、解決していくという姿勢が肝要なのである。

## 2. 福岡市の町づくりのために 山笠をどう生かすか

～市職員や公民館など地域と向き合うみなさんへ、自治の心意気を

### (1) 「ハカタウツシ」

ここで、博多の暮らし・文化の伝統を生かしたコミュニティづくりへの期待効果を考えてみたい。

かつて、博多の山笠は、直方、前原、津屋崎、佐賀・浜崎など各地へ「ハカタウツシ」として伝播した。学ぶ意味、真似することが役立ったのである。近年は北海道でも博多山笠に学び、山笠を作り、過疎化が進む地域の活性化に取り組んでいる。博多は、古記録によると、京都の祇園祭を参考に木偶人形師の小堀家を博多に招き山笠を作ったとの説もある。それぞれの地域が、いいところを学び、生かしてきたのである。そこには地域と人と人との交流・絆がある。交流の機会・場こそが、人々を元気にするのである。「祭りには町の基本単位である家族の絆を生み出す力がある」とする研究者もいる。

福岡市という行政の場で働いている職員でも、博多区内で住んだことがほとんどなく、山笠を体験していないので、山笠など博多の暮らし・文化の活用法・奥深さをほとんどが理解していない、という現実がある。この暮らし・文化の知恵を、具体的に行政の側が、どう生かすのかは、これからの大きな課題であり、もっと職員に、山笠について向き合う機会を認め、行政の場に反映してもらうことも必要であろう。公助に頼らず、市民パワーの活用も併せて、である。校区担当の市職員と、市民がざっくばらんに楽しめる場を設けたらいい。

### (2) 山笠に学ぶ6の知恵

山笠から、現代の町づくりの直接的、具体的なノウハウを捜すことは、さらに模索を続けなければなるまいが、そのポイントとして6つの柱をあげたい。

#### ①集まるのが楽しい、語り合う、という風土を

町づくりの基本となるのが地域に住む人の結束である。ところが近年、企業に勤める人が中心となった町は、人と人をつなぐ地域づくりは、おろそかになっている。孤立・孤独な高齢者が多いのである。そうした現代の社会問題の解決・解消への努力はどうか。町の絆づくりには、危機感が源流にあるとされる。ふつう地震災害などへの対応から、町の人たちの連帯感が生まれるとされるが、高齢化社会の孤立・孤独も緊急課題と考えていい。そのためには、地域の人が、まず集まるのが楽しい、語り合いたい、という風土づくりから始めねばなるまい。これは、山笠・祝祭の原点でもあり、大いに役立てたい。

語り合う・楽しむという拠点として期待されるのが公民館・集会所などである。しかし、現状は、楽しみや、わくわく感はなかなか感じられない。酒食をともに夜まで気軽に楽しむという拠点になっていないからである。公民館などのエンタメ色を大いにアップしなけ

ればなるまい。公民館長の裁量しだいというところが大きい。「公民館を酒食の場にして、何かあつたらだれが責任をとるのか」という批判を受けて立つ行政サイド・議会の心意気・合意も必要だろう。こども食堂の運営法も参考になりそうだ。

参加者がよるこべる企画も必要だ。地域・住んでいる人に学び、それぞれの家族のファミリー・ヒストリー作りをサポートするのもよさそう。生きること・喜怒哀楽の人生を語り継ぐのもいいだろう。先祖が殿様とか、サムライがえらいのではなく、地域住民それぞれの先祖の人生・苦勞を記録・伝承することの大切さを確認しあうのである。

## ②暮らしている町を誇りにする文化・生活空間を

暮らしている町への帰属意識・誇りを、どう育むのか。地域のお世話をすることを誇りとできる時空の創出が課題である。町内会長や民生委員といった地域活動をけん引する仕事を遠慮する人が多いという傾向を打破するために、地域活動に汗を流したみなさんを顕彰する祝祭のような場を模索する必要がある。

山笠では、地域活動に貢献し、亡くなった人を、追善山のとき、山笠を揺すりつつ「祝いめでた」を歌って顕彰する。そのような心がけを生かす工夫が必要であろう。

山笠は、町・地域のお世話をしている人が、町総代・取締・赤手拭などの要職につく。そうした役職で汗を流した人は、山笠の台上りをするとかの晴れ舞台・顕彰の場がある。「地域のお世話をするみなさんを大切にしまさい」ということを教えてくれている。地域のために汗を流した人を耐える場を創出しなければならない。一方、現役を退いたものは、現役への口出しは避け、たずねられたことだけについてアドバイスするという考えも、大切な慣習であろう。

## ③山笠は健康ウォークだ みんなで楽しくウォークの検討を

山笠は、過当競争社会の中に生きる現代人の健康づくり・維持に効果的だ。競争社会・利益追求の会社人間が短時間・短期間でも異空間へ入り、リフレッシュできる意味は大きい。ストレスのたまる社会空間から一時的にでも隔離され無心に走り回るとするのは、現代の競争ストレス社会での隔離療法・カウンセリングにもつながる。仕事が一段落し、夕方からの一時間程度が祭りの場となっている山笠の知恵をどう生かすか。山笠文化は、精神的にも、肉体的にも、よくできた孤独に陥りがちな都市の人間の健康法である。

## ④山笠は町の総合力・個性の象徴 町に個性をつくろう

山笠は、流、それぞれの町の個性・文化・工芸の技などを評価し、競い合う。山笠の制作・できばえは、町の人材の総合力の象徴でもある。みなさんが暮らしている町、校区内で暮らしている町の人材・才能・技などの再発見が求められることでもある。そうしたみなさんを軸に、学ぶ場、楽しむ時間・空間を創出したい。

公民館は、そうした公的組織として期待が大きい。しかし、担当区域が広過ぎて町の高齢

者を生かす事業は、模索・試行錯誤の段階である。公民館には、子育て中の母親・子どもをサポートする子育てサロンや高齢者をサポートしようという高齢者サロンなど新たな取り組みも出ている。しかしまだ高齢者が活躍・期待される取り組み・体制までにはなっていない。高齢者は、かつて老害・見守られるもの、と言われた時代のままだに近い。地域の人材を発掘し、高齢者を、学び合いのできるセンターや公民館などへ招き、多くの人が集まって地域のことなどを学べる場にしていただく、という基本コンセプトを発展させねばなるまい。

#### ⑤女性が商売の先頭に立つ 男は地域活動の時間・機会を増やそう

博多は、男が地域活動に意欲的で、商売・収入の基本については女性・ごりょんさんが軸となっていた商家が多い。子育ては、家族全員、従業員、町内の人…多くの人によって家業と一体化するようにして行われていた。終戦後、西欧文化がどっと入ってくるまでは、家事育児に専念せずに、女性が仕事の先頭に立つということは博多の日常であった。

山笠をはじめ神社や寺、などの行事・祭りが一年中続く博多にとって、男は、祭りなどの準備のために多くの「奉仕」「地域活動」が求められ、女性・ごりょんさんが商売を事実上取り仕切る例が多かったということは忘れ去られがちである。女性が先頭に立って仕事・商売にかかわるといって女性活躍社会が息づいていた。子育ては、一緒に働く従業員や祖父母と「協同」だった。女性が家事／育児にかなりの時間を割いていたというのは、戦後の限られた期間である。女性がリーダーシップを発揮し働く場合は、周りの理解とサポートが必要であるということも山笠は教えてくれる。

祭りの期間を中心に、商売を取り仕切ったごりょんさん・女性たちは、秋の放生会のときには着物を買求めた。博多の呉服屋の大半は、この放生会の前に着物が売れていた。祭りの期間などで店の商売を取り仕切ってきた、ごりょんさんの存在は大きかった。

なお、「若手」と呼ばれる若者は、山笠の詰所で直会の準備、煮炊き、法被の洗濯、あと片付け、子どもの世話なども体得していた。女性の仕事とされがちな家事育児などについても部分的ではあろうが学んでいたことは参考になる。

今日、女性が多い学校との連携が多い地域活動の一つである PTA 活動については、男性が、もっと参画できる時間を増やすべきである、との考えがある。山笠の暮らし文化と発想が似ているのである。企業の中には、勤務時間内での PTA 活動を認めているところもあるので、参考にしたい。

#### ⑥国際交流-親善の証であり、もっと、もっと

山笠のように、アジアとの国際交流、他の地域との交流を大切にし、それぞれの文化、暮らしぶりを受け入れたい。福岡市の海外親善交流事業の先頭にも立つ山笠は、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、中国なども訪問している。国際交流都市フクオカの象徴的存在である。一方、山笠の櫛田入りのときの境内の「清道旗」は、日本を訪れた朝鮮通信使行列が先頭にかかげていた旗で、異国文化・伝統を大切にするという心が息づいている。

かつては、現在の聖福寺一带は、交易にかかわる中国商人の居留地だったという歴史も見逃せない。写真6のように、みんな仲良く国際親善を、との現代へのメッセージと理解したい。ただ、写真7のように、戦前の日独伊・防共協定締結を祝うためにイタリアから親善使節団が福岡市を訪れたとき、特別に山笠を昇いたこともある。祭りは、権力に利用される、という危険もはらんでいることを肝に銘じたい。



写真6 昭和63年(1988年)オーストラリアの国際レジャー博覧会を訪問した山笠 (筆者撮影)



写真7 昭和13年(1938)4月、日独伊防共協定締結を祝うイタリア使節団歓迎のために特別に櫛田入りが行われた (故太田誠一氏所蔵・筆者複写)

## 終わりに

以上は、九州で福岡市一極集中が進む高齢化社会の、よりよい暮らしを求めようとする視点からの町づくりの基本コンセプトである。昭和の博多山笠を追懐しながらの提言である。

博多の暮らしと山笠などの文化の中には、さまざまな「知恵」が息づいている。住んでい  
る町で、祭りを健康に暮らす手立てとし、町を誇りにしているという「魅力」がある。そう  
した共助・共楽の手立てを具体化するために、公民館も含めた行政サイドと、自治の考えに  
立つ住民サイド、2つの視点から光を当てるプランを提案してみる。

### 提案① 時空を越えた みんなのコミュニケーションの場を地域につくろう

山笠の直会の場合などは、地域の老若がともに酒食などをともにし、コミュニケーションの  
場となっている。現在は仮設テントの詰所である。難しい課題解決のためよりも、まず集ま  
ると楽しいという空気感が重要と考えていいだろう。みんなで「祝うたあ」と語り合える時  
空が広がる。女性たちも集まってきて、祭りをサポートしつつ絆を深めている。

また、現実に住んでいなくても、祭りのときに集まっているのをきっかけに絆づくりが  
できている。オンライン時代の絆づくりである。祭りの時には、福岡にやってくる、とい  
うサラリーマンもいる。月に一度、あちこちから参加者がやってきて町内の清掃などに取  
り組んでいる町のケースもある。「祭りの時だけやってくる人も、祭りの準備、その他  
で、がんばってくれており、ありがたい」と、博多松囃子・福神流の武田与一さんは、伝  
統の祭りの存続・継承に欠かせない存在だと強調する。

日ごろから町と向き合うという心がけは大切だが、限られた期間の「絆」も重要になっ  
ている。郊外の新興住宅開発地が、お互いが無縁となっている現実を考えたとき、時空を  
超えて広がっている新しい時代の「町づくり」、地域のお役に立つ人生展開、であろう。  
そこに住んでいなくても住民としての絆づくりになっているのは参考になる。

### 提案② 孤独・孤立を防ぐ手立てに

都市一極集中・高齢化社会、競争社会の中で、どう生きるのか。2023（令和5）年発表の  
総務省統計によると、80歳以上は27万人増え1259万人。人口の10%を超えた。帰属して  
いた会社などは、定年が60～65歳としても、100歳近くまで30年は、地域の人たちととも  
に生きなければならない、会社ではなく、暮らしている地元で、生きる意味を見つけなけれ  
ばならないという現代社会の課題を解決する手立てを模索することは、大きな意義がある。  
現代社会の孤独・孤立の不安の解決策へのヒントさがしでもあろう。

山笠では、高齢者が長老などとして存在感を認められ、顕彰される場でもあるし、葬儀な  
どを出した家の者は、祭りには出ない、という決まりも教えられる。一年間は、故人の供養  
を最も優先しなさい、との教えも学ぶ。山笠は人間としての生き方を学ぶ場なのである。



夫婦共働きのため、子どもたちが通う PTA 活動にも消極的なケースが多くなっているという現実もある。高齢者が、学校と地域をつなぐ役割をするというのも、一つの考えであろう。地域のお役に立てる場をつくっていくのである。

### **提案③ 公助に頼り過ぎず自治の心を**

町界・町名変更でそれぞれの町が東西に分断された土居流の各町は、行政の住居表示ではなく、旧町名単位で、町を復活。住居表示としての町は分断されても心は一つと、町を存続させた。行政にとって管理しやすい街区(ブロック)単位による住居表示と、暮らす人たちにとっての道路(街路・ストリート)方式による町の運営は「ずれ」があってもいいし、使い分けてもいいのである。

自分たちの町は、自分たちで活性化するという心がけを学びたい。コロナワクチンの接種など町内会など地元の住民組織が動かなくても行政からのサービスは拡充されているが、公助ばかりに頼らず、自分たちが暮らしている町の中で、楽しみ、支えあって生きるという精神をはぐくむことが必要であろう。

かつて明治新政府が「旧来の陋習」として山笠を禁止したように山笠は負の課題を指摘される場所もあった。しかし、忘れられがちになっている山笠の源流・生活に根差した土着の魅力に、もっともっと光を当てたい。生活文化の違いなどを認め合う心がけを見つめたい。

国勢調査によると、2050年、福岡都市圏への人口一極集中は、250万人になり九州の人口の4分の1を占めるとの予測が出ている。新時代の町づくりが喫緊の課題である。福岡市は、九州の一極集中の「受け皿」として人口増へとアクセルを踏み続ける施策を考えている。

進む高齢化社会の不安。大地震に世界的な疫病。人が集まって学び、それぞれの個性を生かし、生活・健康づくりなどに役立てるには「集まって楽しむ」という要素が肝要である。町づくりには、そんな山笠の原点が生きて、との考えに立って山笠行事への参画が求められているのではないかと。当然、博多祇園山笠振興会の協力も必要になる。

**注釈：**

- (1) 森弘子：『博多のくらし』海鳥社，2023年。

**参考文献：**

- 1) 『西日本新聞』，2024年1月7日朝刊一面
- 2) 高島福岡市長インタビュー記事『西日本新聞』2024年2月3日朝刊28面
- 3) 『「谷根千」から学ぶ地域ブランドの作り方』，福岡アジア都市研究所報告書，2023年
- 4) 日野仁彦：『町づくり市民夢日記』徳間書店，1988年
- 5) 西日本新聞社・福岡市博物館編：『博多祇園山笠振興会50年史』西日本新聞社，2004年
- 6) 博多祇園山笠振興会：『博多祇園山笠大全』，2013年
- 7) 蓑原敬：『街づくりの変革』学芸出版社，1998年